

頼和「帰家」論

横路啓子*

要旨

「台湾文学の父」と称される頼和は、1925年から1935年まで執筆活動をしたが、1931年前後に最も創作意欲が盛んになり、作家としての「成熟期」を迎える。この時期に書かれた作品のほとんどは、これまでさまざまに論じられ、この時期の「豊作」「惹事」などは頼和の代表作とされている。しかし同時期に書かれた同じ小説である「帰家」については、ほとんど論じられてこなかった。それはこの「帰家」という小説が、頼和にしてはめずらしく自伝的な要素の濃いものでありながら、その主人公が台湾文学の啓蒙者である頼和像からは離れたものであり、抗日の士というコンテクストからは語り切れないものを含んでいるからだと思われる。本論では、こうした観点から、「帰家」の中から「商品としての人間」、「変化する風景」、「身体」などのテーマに分け、従来の頼和像とは異なった読みを試みた。そこに見られるのは、頼和が「進歩＝善/封建＝悪」という二項対立に留まらない姿勢である。また、物語論的にこの作品を見れば、語り手と主人公の関係がそれまでの作品とは異なり、単なる「統治/被統治」という構造ではなく、より複雑な構造となっているのである。これらの点から、「帰家」が頼和の作品群の中で持つ意味を考えれば、それが頼和の執筆活動の中で、ターニングポイントとしての大きな意味を持っているものだと思われるのである。

キーワード: 頼和 帰家 台湾文学 日本統治時代 台湾新文学運動

* 輔仁大学日本語文学科講師

賴和「歸家」論

橫路啓子*

摘要

有「台灣文學之父」之稱的賴和，在 1925 年至 1935 年間發表了種種文學作品，1931 年前後爲他創作的高峰，邁入他創作生涯的「成熟期」。在此期間他所發表的作品，至今仍有許多學者探討，其中又以「豐作」、「惹事」等爲其代表作。可是，同時期發表的「歸家」雖然同樣屬於小說類的作品，卻乏人問津，幾乎都沒有被探討過。筆者認爲，其原因在於「歸家」這部作品，擁有很濃厚的自傳性質，而其主角「我」與「抗日之士」的印象落差太大，透過以往的論述便無法涵蓋這部作品。從這樣的觀點出發，本論提出「做爲商品的人」、「風景的變化」、「身體」等主題，試圖用與以往不同的角度來解讀賴和。從這些分析中，顯而易見的是，賴和已經超越了「進步=善/封建=惡」的二元對立。另外，以故事論的觀點來探討這部作品，則說話者與主角的關係與以往的作品有所不同之處，即已經擺脫了「殖民/被殖民」的故事結構，呈現出更爲複雜的結構。從這些觀點重新思考「歸家」在賴和文學生涯中的定位，我們不難發現這部作品可說是他文學生涯中的轉捩點，意味著這部作品的重要性。

關鍵詞：賴和 歸家 台灣文學 日本統治時代 台灣新文學運動

* 輔仁大學日本語文學科講師

A Study of RAIWA's *GUIJIA*

Yokoji Keiko*

Abstract

This paper is a analysis of the novel “*GUI JIA*(歸家)”. the author RAIHE(賴和) is called “The Father of Taiwanese Literature”, had written many works from 1925 to 1935, but his peak of writing was 1931. In 1931, he published “*FENG ZUO*(豐作)”“*RE SHI*(惹事)”, those of works are said his masterpiece. Although “*GUI JIA*”also was published in 1931, but this novel has almost not been argued all the time. I think this is because of this novel could not be analyzed from the context of the RAIHE as a “Leader of resistance movement at Japanese Period”. From view of this points, this paper argued “*GUI JIA*” by some theme like “man as a product”, “view”, “body”, for giving a new definition to “*GUI JIA*” in the RAIHE’s whole works. And this paper analyzed this novel by narratological point to appear the textual structure of this work has a complicated structure, transcending the binary structure of “colonize/be colonized”idea.

Keyword: RAIHE,*GUIJIA*, Taiwan literature, The Japanese occupation period, Taiwanese New Literature movement

* Lecturer, Department of Japanese Literature and Language, Fujen University